

芸術祭が農山村の住民活動に与える 影響に関する研究

ー 徳島県「上勝アートプロジェクト」を例としてー

下田香保里¹・星野裕司²・仲間浩一³

¹学生員 熊本大学大学院自然科学研究科（〒860-8555 熊本市黒髪2丁目39番1号, E-mail:122d8812@st.kumamoto-u.ac.jp）

²正会員 工博 熊本大学大学院自然科学研究科准教授（〒860-8555 熊本市黒髪2丁目39番1号, E-mail:hoshino@kumamoto-u.ac.jp）

³正会員 工博 トレイルボックス（〒808-0144 福岡県北九州市若松区高須東4-5-20, E-mail:mail@trailbucks.jp）

本研究は農山村において、徳島県勝浦郡上勝町で行われた上勝アートプロジェクトを対象に、プロジェクトを構成する組織および組織を構成する中核的人物を調査し、プロジェクトを通じた住民の生活の変化を分析した。U・Iターン者が多く、農業が主な生活サイクルである住民の属性と生活の変化から、プロジェクトを構成する組織の運営体制に着目し、農山村における地域活性化媒体（本研究ではアートプロジェクト）の継続性について提案を行った。

キーワード:農山村,芸術祭,住民参加,運営体制

1. 序論

(1) 背景と目的

21世紀は画一化された大量生産システムから、知識と情報をベースとした経済社会へと移ろうとしている。文化芸術の持つ感性や創造性は、そこで主体となる人々の創出や産業の振興・活性化にとって重要だと認識される。

2000（平成12）年に施行された文化芸術振興基本法により全国で文化芸術によるまちづくりが取り組まれている。公共事業に比べ比較的低予算で行うことができるため、疲弊した地域で有効な活性化媒体となる事が期待される。

昨今の我が国では特に高齢化・過疎化が深刻な農山村で、アートによるまちづくり（以下、芸術祭と称する。）が多く地域で展開されている。創造都市論の研究者である佐々木雅幸は著書「創造都市への展望 都市の文化政策とまちづくり」の中で、「芸術祭は、地域住民の郷土愛や文化意識が事業活動の前提条件となっており、また、住民や事業当事者間での感情共有は具体的な活動での協働そのものを通じて醸成される。こうした協働は組織内に閉じたものより、外部との交流を含むものとして展開されることが多い。結果としてアートを媒介とした事業活動は地域の活性化やブランド化に有効に働く。」と述

べている。このような芸術祭の開催は長期的かつ、持続的に行われることが地域の活性化媒体として重要であると考えられる。しかし、農山村では継続した開催が見られない地域が多い。その要因は何であろうか。

本研究は徳島県勝浦郡上勝町で行われた「上勝アートプロジェクト」（以下、アートプロジェクトと称する。）を対象とし、①アートプロジェクトを構成する組織および組織を構成する中核的人物、そして②アートプロジェクトを通じた住民の生活の変化について調査し、それらを踏まえた上で、③今後の農山村におけるアートプロジェクトの継続的活動について提案することを目的とする。

(2) 研究の位置づけと構成

アートプロジェクトの研究に関してはプロジェクトの実績が少ないことがあり論文数も少ない。唐沢民は「文化政策による地域の人的資源の形成の過程」の研究で2000（平成12）年から始まった越後妻有アートトリエンナーレを対象とし、また、長畑実らは「現代アートを活用した地域の再生・創造に関する研究」の研究で直島アートプロジェクトを対象としている。全体の傾向としては、周期的開催による芸術祭を対象としたものが多く、今回対象とした上勝アートプロジェクトのような単発イベント形式で行われる芸術祭や、元々周期的開催を予定して

いたものの、何らかの事情で芸術祭が中止、または休止があったものに関しては、既存研究がほぼ存在しない。中止や休止になった理由としては、アートプロジェクトの予算不足や開催地域の事情があるだろう。

本研究では、当初周期的開催を予定していたが2007（平成19）年の1回のみで終了した「上勝アートプロジェクト」を対象とする。芸術祭の準備や運営に深く携わった地域住民の視点から芸術祭開催における地域住民の事情を明らかにし、農山村における芸術祭の持続性について住民の立場から提案を行う。

本研究は1章で研究の背景、目的、位置づけ、構成について、2章で上勝町と芸術祭の概要について、3章でアートプロジェクトに関わる活動組織の実態について、4章で「上勝アートプロジェクト」を通じた住民の生活の変化について論じ、5章で結論とする。

2. 上勝町と芸術祭の概要

(1) 上勝町の概要

徳島県勝浦郡上勝町は四国の南東に位置する中山間地域で、人口1,955人（平成17年）、高齢化率48.5%、標高1,000m～1,500m、総面積10,968haうち85%が主に杉の植林地からなる。



図-1 上勝町の地図

平成3年度の町の基本構想、振興計画の策定で人づくり政策や若者定住政策に重きを置き、第3セクターの設立や独自のまちづくりを行っている。

町内の様々な植物を採取し「つまもの」（日本料理に装飾として添えられる葉、枝、花など）として販売する「いろどり農業」は、農山村地域における自然資源を活用したビジネスの成功例として広く知られている。現在では2億円の出荷額を誇り、国内ひいては海外からのインターンシップや視察等が頻繁に行われている。

(2) 上勝アートプロジェクト

a) 開催までの流れ

徳島県上勝町では、上勝町の持続可能な地域発展の

視点から2002（平成14）年に「経済発展」、「エコロジー発展」および「コミュニティ発展」に資する「上勝住宅マスタープラン」が策定された。推進は2003（平成15）年～2009（平成21）年を目指し、人づくり政策や若者定住政策に重きを置いた計画目標が設定された。住宅マスタープランには、上勝で実施可能な地域発展のため若者定住を目指した様々な手法が盛り込まれており、その中の一つが文化芸術によるまちづくりである。

上勝町では、2007（平成19）年10月27日～11月4日（9日間）に徳島県で開催された「第22回国民文化祭とくしま2007」（以下、国民文化祭と称する。）をきっかけに、「上勝アートプロジェクト～里山の彩生～」を行うこととし、これが文化芸術によるまちづくりの最初の取り組みとなった。本来、国民文化祭とは日頃の成果を発揮するための催しであるが、上勝町では地域を活性化させるためのきっかけとして国民文化祭を実施した。

b) 開催概要

アートプロジェクトは地域資源の活用、アーティストと地域住民の協働の2点をテーマに行われた。アート作品の材料には出来る限り地域にある素材を利用し、町内5つの大字（正木地区、傍示地区、福原地区、生実地区、旭地区）毎にアーティストと住民の協働による作品制作を行った。5地区の作品制作に関わったボランティアは延べ3000人でほぼ地域住民である。材料の搬出から皮むき、組み立てまで全ての行程を行った。



図-2 傍示地区における皮むきの作業風景



図-3 傍示地区における組み立ての作業風景

国民文化祭に向けてアートプロジェクトが動き出したのは、開催年度の2年前にあたる2005（平成17）年である。中山間地域で見られる少子高齢化・後継者不足・地域経

済の破綻・過疎化の進展という課題に向けて、交流活性化による自立的・経済的地域づくりの推進を目指し、上勝町国民文化祭実行委員会が設立された。委員会の事前活動により、町内の住民にはアートプロジェクトの開催趣旨が十分伝えられていた。

町内では「1Q運動会」という独自のまちづくり手法により、5地区が競争してまちづくりの計画を立て自治を行うという特徴がある。そのため、もともとの地区毎の結束力は高く、制作は地区毎に進められた。アートプロジェクトでそれぞれの地区に入ったアーティストは国内外の推薦公募により選ばれた世界的に有名な5名の作家である。

5地区で制作された作品と作家名、現在の作品の状況を、筆者が2011（平成23）年9月末に上勝町に訪問した時の様子と、プロジェクトに関わった徳島大学の学生及び上勝町役場職員へのインタビューに基づき、以下に示す。

〈正木地区〉

作家名：國安孝昌（造形作家・筑波大学准教授）

作品名：淵神の塔

正木地区の雄淵・雌淵におりていく道路上に大きな蜷局を巻いた巨大なオブジェが今も現地にひっそりと残る。木材で作られた作品のため、作家はメンテナンスで上勝町を訪れたこともあるようだが、基本的に上勝町が県からの補助金で維持・管理を行っている。



図-4 2007年の淵神の塔

〈傍示地区〉

作家名：日比野克彦（アーティスト・東京芸術大学）

作品名：射手座造船所

「射手座造船所」は同時に作られた仮説トイレと共にアートプロジェクト時の姿とほぼ同じ状態で残っている。この作品の内部や船の甲板に上がることが出来、内部に電気の配線や音響設備も揃えたため、一通りイベントが出来る体勢が整えられている。作品に上がる階段の先の扉には鍵がついており、鍵は上勝町役場と土地提供者が管理している。アートプロジェクト時の中核的団体であった傍示地区実行委員会がプロジェクト後も地区保存会として名を変え、継続して活動している。この団体により、既存の住民団体と町役場の協力のもと、作品を活用したイベントや維持・管理が比較的うまく行われている唯一

の地区である。



図-5 2007年の射手座造船所

〈福原地区〉

作家名：エコ・プラウオト（建築家・アーティスト）

作品名：タイム・ブリッジ（時の橋）

屋根上の形をした作品が今も現地に残っている。木材で作られた作品のため、作家はメンテナンスなどで上勝町を訪れたこともあるようだが、基本的に上勝町が県からの補助金で維持・管理を行っている。



図-6 2007年のタイムブリッジ

〈生実地区〉

作家名：たほりつこ（造形作家・東京芸術大学）

作品名：トボス彩2007

棚田が広がる民家沿いの道を進んだ先にアートプロジェクトの敷地だった場所がある。ここには作品の面影があるものの管理はされておらず、プロジェクトで使用したと思われる漆喰の鉢が無数に残っている。雑草などが伸び放題で、現時点で見に行っても、アートプロジェクトが行われているとは言い難い状況である。土に戻る素材で作られた作品のため、維持・管理の必要がないことも特徴の一つである。



図-7 2007年のトボス彩2007

〈旭地区〉

作家名：曾我部昌史（建築家・神奈川大学）

作品名：もくもくもく

今は使われていない棚田上に作られた作品は今もアートプロジェクト時のまま残されている。自動車でも行きにくい場所にあり、入り口も狭く行きにくいいためか、入り口には住民手作りの標識が設置してある。夏の台風でちょうど作品に覆いかぶさるように大木が倒れていたが、訪れた9月末の時点ではまだそのままであった。作品の下は屋根状になっており、天気の良い日はたまに住民が寝そべって寛ぐこともあるという。辺鄙な場所であるので、地域外の人が訪れることは稀である。



図-8 2007年のもくもくもく

アートプロジェクトは継続的活動を見込み、文化芸術によるまちづくりへの第一歩として上勝町の大きな期待を背負っていたが、実際その後も活動が継続しているのは傍示地区のみである。他の4地区との違いを見ていく。

c) 傍示地区

プロジェクト期間中、5地区にはそれぞれに実行委員会が設けられた。この委員会は主にそれぞれの地区の作品制作を取り仕切る。傍示地区実行委員会は2007（平成19）年に行われた、傍示地区住民向けの上勝アートプロジェクト説明会の時に発足された。この団体については第3章で詳しく触れるが、アートプロジェクト後も名前を変え地区保存会として活動が継続している。地区保存会は、傍示地区の既存の住民団体や行政と協力し、作品を用いたイベントの企画、作品の維持・管理活動を行っている。5地区のうち団体の活動が継続して見られるのは、傍示地区のみである。

傍示地区は作品の規模が町内で最も大きく、他の4地区に比べ制作に関わった地区住民の負担が大きかった。このとき参加した地区住民が70名程度だったのに対し、延べ人数が1,000人程であったことから明らかである。しかしながら、傍示地区住民は他の4地区に比べると作品制作への参加度が高かった。これは単に作品の規模の大きさの問題もあるが、この団体を構成する個々人に特徴が見られるだろう。本研究では傍示地区で見られる住

民団体において中核的人材を担う個々人にまで焦点を当て、上勝町のような農山村における芸術祭の継続性について、地域住民の視点から考察を行う。

3. アートプロジェクトに関わる活動組織の実態

(1) 傍示地区の制作プロセスと組織の変化

図-9は傍示地区の作品制作プロセスとプロジェクトに関わる中核的組織の変化について示したものである。作品制作は2007（平成19）年4月から6ヶ月間を要した。射手座造船所は中核的な住民団体により、アートプロジェクト後も維持・管理・活用されている。

制作から公開までを含めるプロジェクト期間内で傍示地区の中核的住民団体だったのは「傍示地区実行委員会」であり、上勝町全体の中核的住民団体は「国民文化祭上勝町実行委員会」であった。どちらの団体もアートプロジェクト前後で名称を変え、それぞれ「傍示村OB会」、「上勝アート里山の彩生研究会」と団体として活動している。

団体として形を残し、継続的取り組みが見られるのは上勝町内でも傍示地区のみであり、活動は中核的団体内のみで終わらず、既存の住民団体や行政が協賛という形で関わり継続している。（図-10参照）

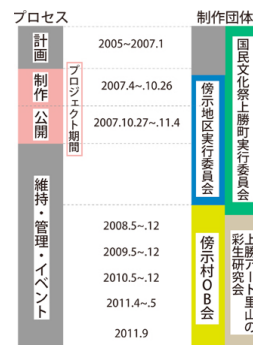


図-9 プロセスと組織の変化を表した図

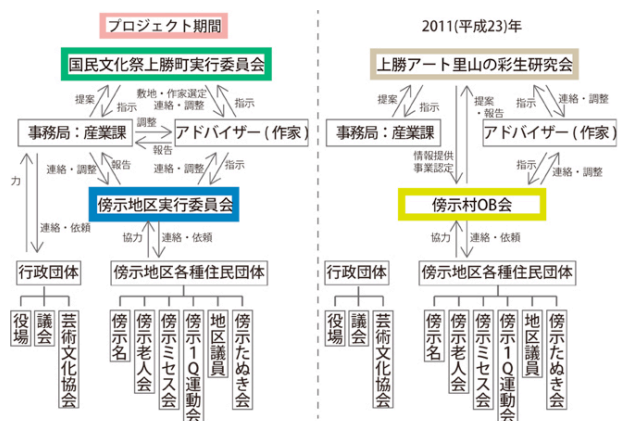


図-10 組織体系図

(2) 中核的組織

プロジェクト期間中の中核的住民団体であった傍示地区実行委員会は、プロジェクト後も傍示村OB会（以下、「OB会」と称する。）として名称を変え継続している。OB会が設立されたのは2008（平成20）年5月である。これは多少の入れ替えがあったものの、傍示地区実行委員会の構成員からなり、引き続き文化芸術によるまちづくりを続けていくために名前を変えて再結成したものである。主な活動はアートプロジェクト後の作品の維持・管理、作品を活用したイベント等の企画・運営である。年3回程の会議や打ち合わせ、年2、3回の維持・管理作業、作品を活用したイベントの開催である。傍示地区ではOB会とは別に作品を維持・管理している人物の存在も確認できている。住民の協働により作品維持が成立している。

(3) 人材の配置

プロジェクト実施時の傍示地区実行委員会と終了時のOB会について、構成員の役割と関係を示したものを図-11に示す。どちらか一方の団体に所属している人に色を付けている。傍示地区実行委員会に関しては2011（平成23）年時点でOB会に所属していない人、OB会に関してはアートプロジェクト以降にOB会に所属した人である。

また、OB会の2008（平成20）年から2011（平成23）年までの活動記録を表-1から表-4に示す。リスト内で灰色が付いているのはOB会の構成員で、傍示地区実行委員会の構成員であったが、OB会の構成員ではない人には図-11と同様、緑色で色付けしている。傍示地区では所属団体に関係なく活動に積極的協力を見せる人材の確認が出来た。その人材については桃色で色づけしている。

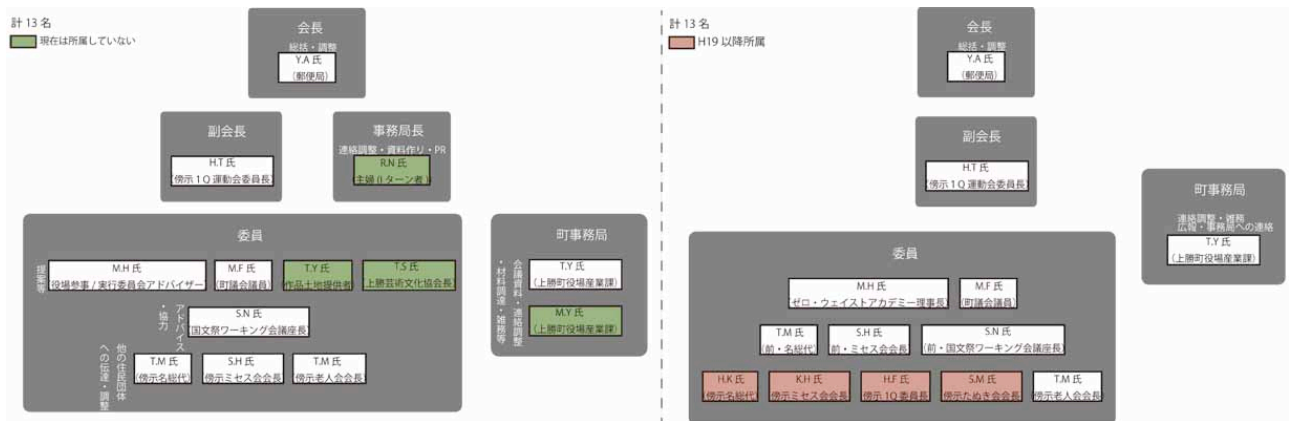


図-11 傍示地区実行委員会と傍示村OB会の構成員の役割と関係

表-1 傍示村OB会活動歴（H20）

期日	5月20日(水)	6月1日(日)	6月14日(日)	6月23日(日)	7月5日(土)	7月10日(土)	7月11日(日)	8月12日(日)	9月2日(日)	9月29日(日)	10月4日(土)	10月10日(土)	12月13日(土)
内容	企画立ち上げ	総会・朝顔祭	トランパル 朝顔祭	七夕・朝顔祭	七夕・朝顔祭	除草	朝顔鑑賞 聖列り	朝顔鑑賞 聖列り	朝顔鑑賞 聖列り・秋桜植	朝顔鑑賞 聖列り	朝顔鑑賞 聖列り	朝顔鑑賞 聖列り	クリスマス・朝顔鑑賞
時間	19:30~22:05	13:00~14:30	13:00~17:30	8:00~9:30	17:00~22:00	13:00~18:00	16:00~17:30	17:30~18:30	19:30~21:30	14:00~17:00	13:00~17:30	13:00~17:00	9:50~10:05
参加者	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子
1	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子	安塚義和 桂 道子
2	峯下 寛	西條マサミ	森本 章	桂 洋典	峯下 寛	藤田欣宏	田中久友	西條マサミ	田中久友	峯下 寛	藤本ユヅキ	藤田欣宏	山田孝明
3	藤田欣宏	針木繁美	下坂徹夫	桂 道子	藤田欣宏	星嶋真人	針木繁美	山田武志	藤田欣宏	藤田欣宏	田中久友	星嶋真人	山田孝明
4	松下高雄	山下和美	藤田欣宏	西條マサミ	松下高雄	山下和美	田中久友	松下高雄	奥澤マユエ	田中久友	田中久友	松下高雄	山下和美
5	針木繁美	井本若代	横山武志	山下和美	針木繁美	横山武志	井本若代	針木繁美	針木繁美	安塚義和	田中久友	泉川悠輝	藤田欣宏
6	星嶋真人	井岡 操	横山武志	大平澄子	星嶋真人		井岡 操	森本 章	星嶋真人	田中久友	井本直幸	藤田欣宏	山田孝明
7	森本 章	藤田陽子	横山武志	森本 章	藤田陽子		桂 道子	横山武志	山田 稔	長岡政司	西谷吉雄	藤田欣宏	山田孝明
8	横山武志	大平澄子		吉田勝子	大平澄子		西條マサミ	山田孝明	松本二香	中野英治	田中久友	藤田欣宏	山田孝明
9	山西としみ		山田孝明		山西としみ		横山武志	桂 道子	藤田陽子	横山武志		藤田欣宏	山田孝明
10		藤井ヨリ子		谷口文子	藤井ヨリ子			大平澄子	桂 洋志			桂 洋志	山田 稔
11		藤井ヨリ子		葛満忠男	藤井ヨリ子			山西としみ	桂 道子			山田 稔	山田 稔
12		空久保菊子		中野英治	空久保菊子			葛満忠男	針木繁美			山田武志	山田 稔
13		峯トフサ子		荒 真澄	峯トフサ子			三田貞恵	大平澄子			森本 章	山田 稔
14		三田貞恵		松本二香	三田貞恵			藤井ヨリ子	松本二香			長岡政司	山田 稔
15		清水東美子		横山武志	清水東美子			西條マサミ	藤田陽子			横山武志	山田 稔
16		松本二香						山下和美				桂 道子	山田 稔
17												大平澄子	山田 稔
18												山下和美	山田 稔
19												井岡 操	山田 稔
20												藤井ヨリ子	山田 稔
21												空久保菊子	山田 稔
22												針木繁美	山田 稔
23												森本幸江	山田 稔
24												藤田陽子	山田 稔
25												三田貞恵	山田 稔
26												山田孝明	山田 稔
小計	8	16	5	7	15	5	2	16	3	9	26	9	15
計	8	21	7	15	5	2	16	3	9	35	15	3	3
累計	8	29	36	51	56	58	74	77	86	121	136	139	142

- ④プロジェクトを通じて変化した平日・土日の生活リズム
- ※③④に関しては今までとの変化が明らかで、継続しているものについて抽出を行う。
- ⑤作品の維持に関して思うこと
- ⑥これからの上勝町・傍示地区に対して思うこと

表-5 アンケート対象者について

番号	氏名	年齢	現在の職業	上勝の居住歴	傍示地区実行委員会	傍示村OB会
01	Y.A	57	郵便局職員	地区内移動で上勝へ	委員長	委員長
02	T.M	70	郵便配センター勤務/農業		委員(傍示名総代)	委員
03	Y.F	64	議員/農業		委員(町議会議員)	委員(町議会議員)
04	T.Y	62	自営業(土木建設業)	Uターン	委員(作品土地提供者)	
05	T.S	83	一(農業)		委員(上勝芸術文化協会長)	
06	T.M	84	一(農業)		委員(傍示老人会会長)	委員(傍示老人会会長)
07	H.S	64	農業	結婚して上勝へ	委員(傍示ミセス会会長)	委員
08	S.N	37	大学教員	北海道からIターン	委員(国文研ワーキング会副会長)	委員
09	H.T	38	自動車整備	Uターン	副委員長(傍示IQ運動会会長)	副委員長
10	M.H	62	町役員/農業		委員(傍示地区実行委員会アドバイザー)	委員(ロゴ・ウェブサイトアドバイザー)
11	R.N	59	会社員(いるどり)	北海道からIターン	事務局(主婦)	
12	J.Y	55	上勝町役場産業課	Uターン	町事務局長(上勝町役場産業課)	
13	M.Y	31	上勝町役場産業課	Uターン	町事務局長(上勝町役場産業課)	
14	K.H	62	公社員		委員(傍示ミセス会会長)	委員(傍示IQ運動会会長)
15	S.M	72	農業		委員(傍示たぬき会会長)	委員
16	H.F	45	日商科学社員	Uターン	委員(傍示IQ運動会会長)	委員
17	H.K	59	団体職員		委員(傍示ミセス会会長)	委員
18	K.Y	57	自営業(土木建設業)	結婚して上勝へ	作品土地提供者/1Q運動会副委員長	
19	J.S	46	労働者	Iターン(5年以内)		1Q運動会委員
20	Y.H	64	農業		常時参加	常時参加
21	H.Y	55	アルバイト			
22	M.N	57	上勝町役場建設課		設計図制作者	
23	T.Y	52	郵便局アルバイト/農業		設計図制作者	
24	T.I	76	大工/農業		常時参加	
25	Y.I	77	大工/鶏産業		常時参加	

アンケートは2011(平成23)年12月20日に配布し、2012(平成24)年1月11日に回収を行った。また、数名に対してはヒアリング調査を行った。調査結果を元に、傍示地区住民の属性とプロジェクト実施前と実施後の生活の変化との関係について考察する。

(2) 調査結果

a) 住民の属性

アンケート対象者の年代、参加団体、家族構成、居住歴(Iターン/Uターン)、生活サイクル属性として整理し、クロス集計を行った。属性として挙げた5項目の狙いを以下に示す。

[年代]: 住民の中で活動の中心を担う年代を把握する。

[参加団体]: 2012年の時点で住民それぞれの所属団体を把握する。

[居住歴(Iターン/Uターン)]: 集落の中で長く地元にいる者、Iターン者、Uターン者を把握する。

(本研究では、以下、本文・表などで「地元」に長くいる者を「地元もの」と称する。)

[生活サイクル]: 農業従事者、家の外、集落の外で働く者の平日および土日の生活サイクルのデータより、それぞれの時間資源の違いを把握する。

各項目のクロス集計をその狙いととも表-6から表-8に示す。

表-6[居住歴]×[年代]: 年代別による居住歴の違いを把握する。

表-7(左)[居住歴]×[年代]: 居住歴による年代の違いと、地元ものとU・Iターン者の暮らしの違いについて

把握する。

表-7(右)[生活サイクル]×[居住歴]: 居住歴による参加団体の違いを把握し、地元者とU・Iターン者の団体への参加分布を明らかにする。

表-6 参加団体×年代のクロス集計結果について

参加団体 居住歴	傍示村OB会		傍示名	傍示老人会	傍示ミセス会	傍示IQ運動会	地区議員	傍示たぬき会	芸術文化協会	上勝町役場産業課	無所属	計
	Uターン	Iターン	地元もの	計	計	計	計	計	計	計		
Uターン	H.T ♂	T.Y ♂				T.Y ♂		H.T ♂			M.Y ♀	5
Iターン	S.N ♂ Y.A ♂ S.H ♀	S.N ♂ Y.A ♂			K.Y ♀ S.H ♀	J.S ♂		Y.A ♂ S.H ♀	J.S ♂	T.Y ♂	R.N ♀	13
地元もの	H.K ♂ S.N ♂ Y.F ♂ T.M ♂	H.K ♂ T.Y ♂ S.N ♂ K.H ♀ Y.H ♀ T.M ♂			H.Y ♀ K.H ♀	S.N ♂	Y.F ♂	T.Y ♂ Y.F ♂ Y.H ♀				17
計	8	9	0	4	3	1	6	1	1	2	35	

表-7 居住歴×年代、生活サイクル×居住歴のクロス集計結果について

居住歴 年代別	居住歴				生活サイクル						計	
	Uターン	Iターン	地元もの	計	平日	土日	非農業(労働)		農業	家庭		
30	H.T ♂ M.Y ♀	R.N ♀ S.N ♂		3			農業	非農業	お休み	農業	家庭	
40		J.S ♂		1								
50		T.Y ♂ Y.A ♂ K.Y ♀	H.Y ♀ T.Y ♂ H.K ♂ S.N ♂	8	Uターン			H.T ♂ T.Y ♂	M.Y ♀			3
60	T.Y ♂	S.H ♀	K.H ♀ Y.F ♂ Y.H ♀	5	Iターン	Y.A ♂ T.Y ♂		K.Y ♀ J.S ♂	S.N ♂	S.H ♀	R.N ♀	7
70			T.M ♂	1	地元もの	K.H ♂ S.N ♂ Y.F ♂ T.M ♂ H.K ♀		H.Y ♀	T.Y ♂	Y.H ♀		8
計	3	7	8	18	計	7	5	3	2	1	18	

それぞれのクロス集計から得られたことを以下に示す。

7) 表-6

参加団体について居住歴別で見ると、「傍示老人会」と「地区議員」については、U・Iターン者の所属が見られない。このことは、「傍示老人会」については80歳以上の者からなる団体のため、若い世代からなるU・Iターン者の所属がないと言える。また、「地区議員」は地域にとって政策決定の当事者として認められた存在である。いわゆる新参者であるU・Iターン者はそのような理由から所属がないと言える。一方、「傍示村OB会」と「傍示名」、「傍示IQ運動会」、「傍示たぬき会」についてはU・Iターン者と地元ものが各人所属しており、居住歴別にはバランスのとれた人材の配置がされていると言える。「傍示IQ運動会」については、事務局(町職員)3人と委員6人を地区から選出し構成されているが、委員に関しては女性2人以上、U・J・Iターン者1人以上、60歳以上1人以上および40歳未満1人以上を含むことを基準としてい

るためバランスのとれた人材配置が可能となっている。その他の団体に関しても住民の居住歴に関係なく構成されているため、このような人材配置となったと言える。なお、「傍示10運動会」に関しては地区内の委員が6人となっているため、居住属性から見ると手薄な結果になっているが、割合的には居住歴に関係なく均等な人材配置ということが出来る。一方、無所属の2人はU・Iターン者であり、いずれも30代女性である。また、全体の70%の住民が参加団体を兼任している。

イ)表-7 (左)

居住歴を見てみるとU・Iターン者は30, 40代のいわゆる町の若者世代が5人、地元ものは50, 60, 70代で8人である。U・Iターン者には50, 60代が5人見られるが、うち女性2人は結婚して上勝町に移り住み、うち男性1人は両親の高齢化に伴いUターンするなどそれぞれ理由があるため、年代別の傾向とは切り離して考える。Iターン者が多く見られる傾向としては、上勝町のマスタープランの一つである「若者定住施策」で第3セクターによるIターン者の推進などが盛り込まれているためだと考えられる。

ウ)表-7 (右)

生活サイクルについて見てみると「平日：労働（非農業）、土日：農業」と「平日：農業、土日：農業」のいわゆる農家または兼業農家の者はIターン者と地元もので9人で、「平日：労働（非農業）、土日：労働（非農業）」、「平日：労働（非農業）、土日：お休み」のいわゆるサラリーマン生活者はU・Iターン者で6人見られる。表-7（右）と合わせて見てみると、兼業農家の9人はIターン者や地元者の50代の人々で、サラリーマン生活者6人はU・Iターン者の若年層であることが判る。Iターン者や地元ものと言った、上勝を良く知り親しむ人々が、上勝の土地、日々の自然の状況や変化に生活が依存する農家を営んでいる。

以上の結果より、明らかになったことを以下にまとめると、1) U・Iターン者が多く、2)70%以上が農家または兼業農家である。3)住民団体の中心的担い手は50, 60代であり、4)各団体はU・Iターン者が均等に分散する様に配置されている。また、規模の小さい集落の特徴として5)住民団体の兼任が多く、特定の人の負担が大きい。

b)住民の生活の変化

自由記述回答で得たアンケート対象者の生活の変化を、プロジェクト前、プロジェクト期間中、プロジェクト後の時系列ごとに筆者が分類し、これをさらに住民の属性（居住歴と生活サイクル、参加団体）ごとに分類した。

それぞれの属性ごとに時系列に沿って示したものを以下の表-8から表-10に示す。それぞれ、表8は居住歴、表9は生活サイクル、表10は参加団体の属性を持つ住民のデータを示している。

表-8から表-10から読み取れることを、以下に示す。

ア)表-8

生活の変化を[U・Iターン者]と[地元もの]別に時系列で見してみる。[U・Iターン者]の中には、「Iターンのため知り合いが少なかった」がアートプロジェクトの作品制作を通じて「傍示の方とたくさん知り合い、仲良くなれた。」という記述がある。またその他にも、作品制作を通じて「交流が深まった」という記述が見られる。Iターン者に関しては“よそ者”ということで地元住民との距離を感じる者、このアートプロジェクトをきっかけにその距離が縮まった者も見られた。この「交流」には、傍示地区内の交流を指すものと町外へのコミュニケーションツールを使った情報発信を指すものがあつた。[地元もの]のほとんどは兼業農家であり、この特徴に関しては表-10で示す。

イ)表-9

生活の変化を[兼業農家]と[非兼業農家]別に時系列で見る。[兼業農家]の者は普段平日に外で仕事、土日に家の作業を行い、農業を営んでいる者がほとんどである。アートプロジェクト最中の記述の中には「ボランティアといえど、仕事も生活も大事なので負担は大きかった。」というものや、「大分家の作業が遅れた。」というものがあつた。また、「父さんと息子の家族総出で行った。」という記述があるが、これは制作期間中家の仕事が完全に中断する状態である。これは家庭にとって収入の犠牲が大きい。一方、家族の大黒柱が制作活動に参加していたため、「夫の時間が取られた。」という家族の不満の記述も見られた。以上からも判るようにアートプロジェクト中の制作作業による各自の負担は大きいものであつた。[非兼業農家]の者は普段平日に外で仕事、土日も仕事か休みの者が多い。土日が仕事の者は制作活動への参加が少なくなっている。この者たちは普段から土日に行われる住民活動への参加は仕事のために少ないと考えられる。また制作活動に参加した者の中には、アートプロジェクト最中「大きな肉体的負担、精神的負担」や「平日の仕事にも負担が出た」、「体調を崩した」などの記述が見られる。普段は休みのはずの週末に慣れない作業をしたため、それも長期間であつたことも重なり、兼業農家の者より負担を訴える記述が多く見られると考えられる。[兼業農家]と[非兼業農家]の者を比べると、[兼業農家]の者が活動の中核的人材を担っている。この人材のおかげで今回のアートプロジェクトの作品が完成したと言っても過言ではないだろう。

ウ)表-10

生活の変化を[傍示村OB会]所属者と[非傍示村OB会]別に時系列で見る。[傍示村OB会]の構成員に関しては「土日は実家でも農業が主であるが、地域ボランティアに積

極的に参加」や「IQ運動会のお陰で傍示の団結力は強い。」などにもあるように普段から地区の活動に参加している傾向があると言える。アートプロジェクト中はこれまでの制作活動歴にもあった通り、7ヶ月間毎週末に及ぶ制作作業で各参加者には大きな負担がかかった。アートプロジェクト最中の記述には「他の家族に大きな負担をかけた」、「土日が射手座造船所中心の活動となり、家のことが出来にくくなった。」「意気込みすぎると良くないと思う。」「船を造るのは最初で最後だ。」など当時の大変さが伺える記述が多く見られる。また、プロジェクト中は傍示地区実行委員会として制作の指揮を執っていた者もあり、他の参加者や住民からの「何のために船を造ったんだという声」を「説き伏せるのも大変だった」という記述もある。このような大きなプロジェクトの中核的団体を担うということもあり、「いろいろな心配事があり、仕事が手に就かない事もあった。」という記述もある。これらの構成員の大きな支えによってこのプロジェクトが動いていたことが判る。作品の維持・管理に関しては「草刈り、清掃、船の補修、材料の保持等の定期的な作業がある。」「材料の痛み具合や強度が心配。」などの記述から判るように活動が行われている。活動の継続のために上勝町の「高齢化が進み維持・管理が難しく、」年々手伝いが減ってきている」傾向があるため、「若い人の参加」を願う声もある。そして「傍示地区に収益を生み出せる拠点として仕掛けをしたい」、「アート作品を使って経済的なものに繋がられているところはない。一つの可能性としては、上勝をひとつの単位として考えて、温泉みたいなのがツアーを組んだら出来るかもしれない。」というような記述が見られるが、これは自分たちだけでは作品の活用が難しいということを示唆した記述だとも捉えられる。

表-8 居住歴別 (U・Iターン者) の生活の変化

居住歴	始まる前	プロジェクト期間中	終わった後
U・Iターン者	親が上勝町出身だが、自分はIターンのため知り合いが少なかった。 子供の部活、家事、県内の人の懇親	当時は産業課所属だったので、仕事として参加。平日は通常勤務で、土日はほとんど休めなかった。 ブログ(約3000アクセス)で活動のことを広くいろいろな人に知ってもらった。土日はほとんどなかった。"仕事を"が地域活動する"仕方"をいろいろと考えることが出来た。	作品作りを通じて、傍示の方とたくさん知り合い、仲良くなった。組織を離れた後も、他の場面で交流することもある。 日比野先生と個人的にコミュニケーションがとれるようになった。視点を「町内」から「県内全体」に。
		自分はミシンが出来るから家からミシンを持ち出して旗を縫った。	みんな大変だったから、こんな作ってどうするって怒ってるんだけど、よく集まる。機が壊れは余計増したように思う。
	土日も平日と同様仕事何もない山の中に有名な芸術家の方の作品が出来ることにひそかな喜びを感じた。	精神的にも体力的にもついていくのが大変。慣れたのは半ば頃、だんだん当たり前になって来た。(だんだん手伝いが減って来る。)10年と言わず20年でも付き合っていきたい。	友人や親戚、他の地域の方がかわがざ見に来るようになった。船の維持管理のため年間に何度も集まっている。(だんだん手伝いが減って来る。)10年と言わず20年でも付き合っていきたい。

表-9 生活別 (兼業農家と非兼業農家) の生活の変化

生活	始まる前	プロジェクト期間中	終わった後
兼業農家		主人の時間が取られた。活動は特にしていない。 長期間にわたる土日連続のボランティアは大変だった。ボランティアといえど、仕事も生活も大事なので負担は大きかった。	材料の木の痛み具合や強度が心配。町を挙げて集落再生活性化に取組んでいる。具体的な方策がある訳ではないが、何かアクションを起こさなければ 町外から来てくれた人々に案内して自慢出来る。これからの管理が大変。射手座造船所は10年だけでなく何とか補修して残したい
土日は農業	土日はほとんどボランティア活動に参加した。大分家の作業が遅れた。	平日、土曜は仕事、日曜はほぼ船制作だった。	
土曜は仕事で日曜は家で農業	平日、土曜は仕事、日曜はほぼ船制作だった。	仕事も土日の農業もきちっとやっていたので大変だった。大工さんに教えてもらったのが、今も役に立っている	
土日は農林業	仕事も土日の農業もきちっとやっていたので大変だった。大工さんに教えてもらったのが、今も役に立っている	春になったら朝顔の種を撒いて朝顔の世話をした。父さんと息子と家族総出で行った。	思い出の建物で気に留めて見る。息子はこれの影響で大工になった。朝顔はもう世話をする人がいないから抜かないとしようがない。
非兼業農家	土日も平日と同様仕事何もない山の中に有名な芸術家の方の作品が出来ることにひそかな喜びを感じた。	精神的にも体力的にもついていくのが大変。慣れたのは半ば頃、だんだん当たり前になって来た。(だんだん手伝いが減って来る。)	友人や親戚、他の地域の方がかわがざ見に来るようになった。船の維持管理のため年間に何度も集まっている。(だんだん手伝いが減って来る。)
土日は仕事	制作場所が自分の土地で自宅の真上の為、良い作品を残したいという思い。最初の説明会から最終まで立ち会った。大変な肉体的負担、精神的負担	制作場所が自分の土地で自宅の真上の為、良い作品を残したいという思い。最初の説明会から最終まで立ち会った。大変な肉体的負担、精神的負担	維持修繕はしているが、それ以上になると大変だ
ボランティアには是非参加したい		活動には最初から参加。男性と同じように力仕事にも参加した。仕事にも負担が出たし、体調も崩した。「明後日朝顔プロジェクト」に参加して、日本中の人の繋がりが出来た	気軽にたくさんの人たちが出来る方法を模索中。維持は大変な苦勞。少しでも若者の定住を期待。

表-10 参加団体別 (傍示村OB会) の生活サイクル

参加団体	始まる前	プロジェクト期間中	終わった後
傍示村OB会	土日は実家での農業が主であるが、地域ボランティアに積極的に参加。	実行委員長を務め、制作日程を決定してから毎回の参加。委員との検討の連続だった。実家の土日の農作業に影響が出て他の家族に大きな負担をかけた。	草刈り清掃、船の補修、材料の保持等の定期的な作業がある。若い人の参加が必要だ。傍示地区に収益を生み出せる拠点として仕掛けをしたい。
		長期間にわたる土日連続のボランティアは大変だった。ボランティアといえど、仕事も生活も大事なので負担は大きかった。	材料の木の痛み具合や強度が心配。町を挙げて集落再生活性化に取組んでいる。具体的な方策がある訳ではないが、何かアクションを起こさなければ
家の仕事(草刈り、田等)	土日は射手座造船所中心の活動となり、家のことが出来にくくなった地域内での連携が取れた	平日、土曜は仕事、日曜はほぼ船制作だった。	期限付き(10年間)の保存でありもったいないと思う反面、古くなればなる程メンテナンスがかかるという複雑な思いがある。
土日は特に何もない。		毎週末は現場で作業。大工道具を揃えた。(2万程度)意気込みすぎると良くないと思う。	
休日(農業)		休みの日は出来るだけ作品の制作に協力。絆も増してきた。	周辺の草刈りや美化活動、花の種まきや除草、水やり等が大変。高齢化が進み次第と維持管理が難しくなってきた。
		もう船を造るのは最初で最後だと言いつつ、遊ぶ感覚	アート作品を使って経済的なものに繋がられているところは町内にもない。一つの可能性として、上勝をひとつの単位として考えて、温泉みたいなのがツアーを組んだら出来るかもしれない。雇用の可能性というは出てくる。
もともとIQ運動会のお陰で傍示の団結力は強かった。成績も良い。		何の為に船を造ったんだと言う声も。これを説き伏せるのが大変だった。普段あまり人と話す機会のない人がみんなに会えて嬉しかったと言った。	

以上、表-8から表-10より以下の3点のことが言える。

- 1) U・Iターン者にとって地域の活動に参加すること

は住民と交流をはかる大きなきっかけとなり、今回のアートプロジェクトは長期間に渡りまさに皆で協働したプロジェクトだったため絶好の機会となった。また、その後の交友関係にも影響を与えていると言える。

2) 兼業農家を営む者はアートプロジェクト中、土日におこなう農作業が中断し経済的にも大きな負荷がかかった。この負荷のままではプロジェクトに長く参加することは出来ないだろう。

3) 傍示村OB会に属する者はアートプロジェクト時中核人材となる者が多かったため、責任の大きさに、肉体的負担に加え、精神的負担が大きかった。これらの人材により作品制作の成功と現在までの維持・管理がなされているが、町の高齢化や作品の活用の難しさから、今後は外部からの協力を要請するなどした作品活用の可能性があると考えられる。

(3) 考察

アンケート対象者の属性から生活の変化を分類し、アートプロジェクトが住民活動に与える影響を確認できた。ここから本稿における考察を図-12, 13に示す。

U・Iターン者にとってプロジェクトの協働作業は、まちの内部で住民同士の交流の機会となる可能性があると言える。その一方、農山村で暮らす人々の生活サイクルは、平日それぞれの仕事と土日の農作業で成り立っているため、長期間に渡る土日の作業は大変な負担となった。アートプロジェクトを地域で持続させるためには地元住民による運営体制を考慮する必要がある。図-12に示す様に、現在、上勝町で見られる運営体制の特徴は各住民団体におけるU・Iターン者の分散と、信頼のある地元ものによる住民団体の兼任である。前者の分散は団体の質を高め平準化するために効率が良いと言えるが、同時に地元に入ってくる外部の柔軟な価値観を分散していると言える。これは後者に見られる一部の人材への負担を軽減する可能性を狭めていると考えられる。柔軟な価値観を持ち合わせる外部の者と、地域のことをよく知る地元ものの役割が相互補完的な関係になる運営体制の見直しが必要だと考えられる。

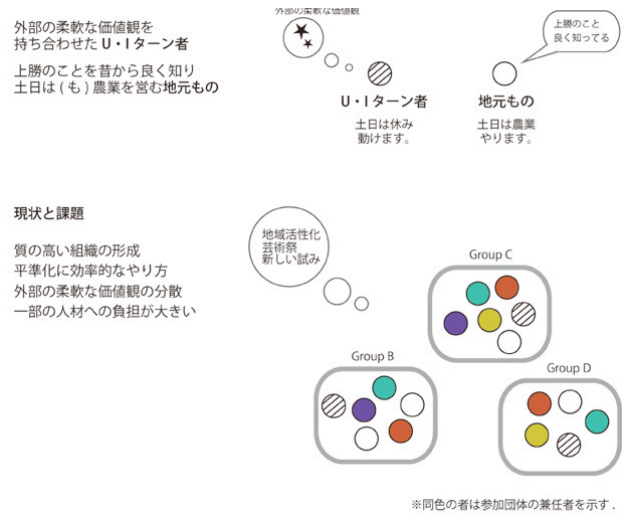
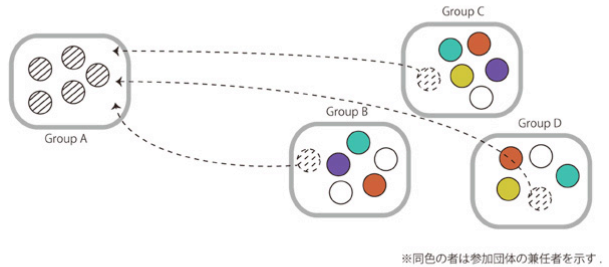


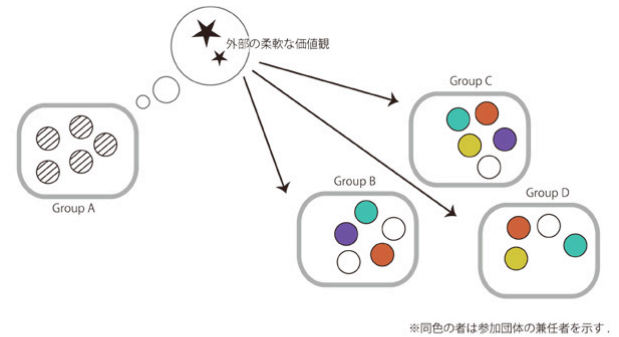
図-12 住民団体の現状と課題

提案

U・Iターン者だけの Group A を作る。



①外部の柔軟な価値観を取り入れる。



②一部の人材への負担を軽減する。

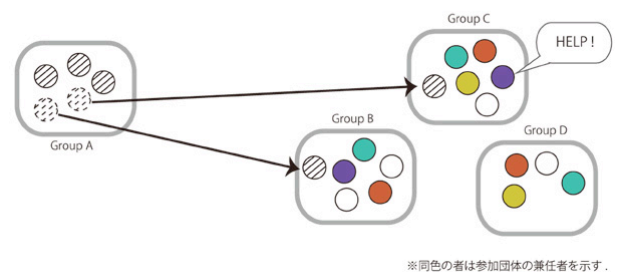


図-13 住民団体の運営体制についての提案

5. 結論

本研究で明らかになったことを以下に示す。①アートプロジェクトを構成する組織および組織を構成する中核的人物を明らかにした。②アートプロジェクトを通じた住民の生活の変化について調査し、③今後の農山村における地域活性化媒体（本研究ではアートプロジェクト）の継続性について地域における運営体制の点から提案した。

謝辞：本研究のアンケート調査において山下和美氏、上勝町役場の横山武志氏には多大なご協力を頂いた。厚く謝意を表する。

参考文献

- 1) 八田典子:芸術受容の「場」の変容-「大地の芸術祭」に見る「展覧会」の新しいかたち-, 島根県立大学総合政策学会, 総合政策論叢第13号, 2007
- 2) 徳野貞男:農村(ムラ)の幸せ, 都会(マチ)の幸せ-家族・食・暮らし, 生活人新書, 2007
- 3) 佐々木雅幸+総合研究開発機構:創造都市への展望-都市の文化政策とまちづくり, 学芸出版社, 2007
- 4) 暮沢剛巳, 難波祐子:美術をめぐるコミュニティの可能性-ビエンナーレの現在, 青弓社, 2008
- 5) 熊倉純子:アートマネジメントにおける市民運営と専門性-取手アートプロジェクトの試みから-, アートマネジメント研究8号, p. 60, 2007
- 6) 小林美津江:地域活性化の新しい潮流~文化芸術の可能性と創造都市~, 立法と調査 No. 314, pp. 133143, 2011